



惑星地質学

宮本英昭, 橋 省吾, 平田 成, 杉田精司 編

東京大学出版会 3,200 円+税, 260 頁

教科書

お薦め度

☆☆☆☆☆

書評というのはどうやら、「ちょっと遠いところ」からアプローチするのが通例のようだが、結論から先に書いてしまおう。ふんだんに最新のカラー映像を収めた本書は、一応「教科書」ということになっているが、多くの買い手（読み手）にとっては「資料集」となるだろう。正直な話、地質学ないし（固体）惑星科学についてかなりの素養がなければ、本書を独学のための「机上の先生」として惑星地質学を学ぶのは、大学院生でも困難かもしれない。しかし、本書を使いこなせる指導者の下で用いられれば、おそらく現時点で「世界最強の指南書」に変貌する。現実にもそういう環境にある学生たちが本当に羨ましい。それほどに、研究書としては最高級のクオリティー、五つ星、必携の書である。

まえがきによれば本書は、編者の宮本氏の講義資料集としてスタートし、「細部に至るまで内容を検討し、教科書としても使うことのできる図録を目指」して編まれたものである。一般的には資料集となる、という理由もその成立過程によるのだろう。最新の資料を解説するのだから最新の知識が必要であり、それを説明するのに基礎から丁寧に説明していたら、惑星一つごとに1冊の本ができてしまう。また教科書として使いにくいのは、まさに今第一線で活躍する研究者が各章を執筆しているためかもしれない。第一線の研究者の話というのは、門外漢には意味不明になりがちだ。だが逆に、熱意や秘めたエネルギーのようなものはよく伝わるものである。例えば第II部第7章・8章の木星・土星の衛星と環についての記述などは、何と云うか、究極の趣味人である研究者のエネルギーの源泉＝「どう？ どう？ 面白いでしょ！」と言わんばかりの筆致である。また私がこれまでに携わってきた火星や金星などは、現在

最も盛んに研究成果の上がってきている天体だけに、「微に入り細を穿って書きたいのをこらえながら」詳述されている。こらえた分だけ事実の羅列（それでもかなりの分量！）になってしまった感がぬぐえない……そんな贅沢な残念さを感じてしまう。

私の見るところ、今この書評を読んでいる方々が本書を手取るべき一番の理由は、第II部第3章「月」にある。太陽系内天体の研究を「近視眼的だ」と言い放ってみたり、あるいは長らく太陽系の（小さくない）Objectsを「天体」とは思わなかったなど、遠いところしか見えていない「天文学者」あるいは「宇宙物理学者」の人々は、月はまだ「枯れた」対象としか思っていないかもしれない。しかし月は、とくにわれわれ日本の天文学者は注目しなくてはならない、直近の未来に天文学・宇宙物理学に大きな知見をもたらす「天体」なのである。そう、系外惑星系がアツい今こそ、惑星系形成論に重要な直接的知見が得られる月を研究しなくてはならない。そのためにわが国をはじめ、月の直接探査が進んでいるのだ。そしてそこから成果を上げるためのキーになるのが、まさにこの惑星地質学なのである。その意味で、何としても「遠いところしか見えていない」人々にも、この章だけは読んでいただきたい。国民からの信託を受けた多額の税金を投入して実施された探査計画の成果を語れなくて、なぜ「天文学者」を名乗れようか？

ともかく、一度手に取って、美しい画像たちを眺めてみていただきたい。きっと「おっ！これは買っておこうか」と財布を開けてしまうだろう。

中串孝志（和歌山大学観光学部）